



求めよ、さらば開かれん

—— 坂本研究室 ~ 建築学科 ——



坂本 一成 教授

建築家と聞いてこういったイメージを持つだろうか。図面を引いたり構造計算をしたりする姿を連想するかもしれない。あるいは、それは建築のデザインにこだわる姿かもしれない。いずれにしても一般的な建築家のイメージは技術者や芸術家といったものではないだろうか。

実際の建築家は、様々な存在する建築物が、人や環境に対していったい何を与えられるかを考える、むしろ思想家といった言葉がよく似合う。坂本先生も現代社会の空間に、新しい秩序を作り出そうと追及する建築家のひとりである。



建築は時代を表わすバロメータ

建築は他の工業製品と同様に一つの形を持った存在である。またその内部に人が生活するための、外部とは異なる空間を有することの出来る存在でもある。建築を新たに生み出すことは、既存の環境を変化させ、その存在によって周囲のあるべき姿まで決定することができる。すなわち建築を創造することは、その内外に新たな空間を作り出す行為なのである。

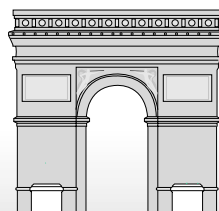
人間の生活は時代とともに変化し、建物もまた使用する人に合わせて変化する。すなわち建築は作られた時代の精神状況をそのまま表わしていることになる。これは歴史的な建築物を振り返ってみれば容易に理解されるだろう。

日本において、初めての武士政権が誕生した鎌倉時代には、それまでの貴族的な建築とは趣異なる豪快な東大寺南大門が作られた。室町時代、政治が安定した足利義満將軍の頃には、華美で奇抜な金閣寺が建てられ、幕府が衰退していく義政將軍の頃には、幽玄な銀閣寺が建てられた。それぞれの時代を特徴づけるキーワードをそこに見ることができる。何々時代とは、その時代の文化も合わせて想起させる言葉なのである。

では平成という時代を、未来においてはどのような言葉で捉えるのだろうか。どんな建築が今の時代を象徴しているというのだろうか。そもそもこの時代の精神とは何だろうか。

この問いに対する明確な答えは存在しないだろう。なぜなら現代においては、個々に共通した時代精神がない、ということが時代精神であると言えるような状況であるからだ。

当然このような状態では、かつて建築が持っていた時代を表すものとしての意味が弱まってくるだろう。こうした状況において、現代の建築家を代表する坂本先生は、一体どんな建築像を目指しているのだろうか。





プライベートからの脱却

家に帰ればほっとする、誰にもそんな気持ちになるときがある。自分の部屋ならなおさらだ。それは家や自分の部屋が、仕事や外部とのつながりから開放してくれるプライベートな場所、安住の場所であるからだろう。しかしそんな家も外界との接触を完全に断っているわけではない。たとえば窓は単なる換気のためだけでなく、太陽光を取り込み、自然の景観を取り込む、つまり外界との接点として存在している。

実はこのプライベートな場所と外部とのつながりこそが、坂本先生の提唱する建築像を読み解くヒントになるのだが、先生は実際に建築の中でどのように表現されているのだろうか。そこでその実際例を先生の最近の設計例の中に探ることにしよう。

写真1は坂本先生が現在設計中の「project SA」という住宅の模型である。この住宅は、斜面上に建てることを考慮に入れたユニークな構造を持っている。

斜面上に住宅を建てる場合、普通は一旦土地をひな壇状に造成してから行なうが、project SAの場合、土地の傾斜という自然をそのまま残している。しかも通常の家でいう床にも傾斜が取り入れられ、床全体がその傾斜を保っているのである。

玄関も外界との接点としての存在だ。この家の場合、外部の傾斜が連続して家の内部にまで続き、外とのつながりを残したまま、つまり外部と内部との境界が曖昧のまま、気がつかないうちに家の内部にたどり着いていたということが起こ



写真1 project SA

る。また一階、二階という概念が当てはまらない床であるが、登りながら目に入る窓からの風景と、下るときのそれとでは、同じ窓枠から見たものであるにも関わらず、その視線の違いから、まったく異なった様相を見せる。project SAは常に外界とのつながりを意識させることが分かっていたのだろう。



写真2 幕張ベイトウン パティオス4番街

次に写真2を見てもらいたい。このマンションは坂本先生が他の建築家と共同で設計を担当し、昨年千葉市に完成したものである。この「幕張ベイトウン パティオス4番街」は、いくつかの独立したマンションが口の字型に集合しており、その建物下部に商業施設、駐車場などを取り入れた、それ自体が独立した街を目指した構造を持っている。一見すると閉鎖的にみえるが、所々に隙間があるため、外部からも中庭に行き来できる。また窓が多数配置されているため、視線を移せば自然に街や中庭を見渡すことができ、そこに生活する人々の動きを目で追うことができる。

現代では土地や建物はそれぞれが所有権を主張するように、明瞭な境界が設けられているのが普通だ。それを考えれば、外部の人間を内部に自由に引き込んでしまえるこの構造は驚きに値する。

マンションの各部屋は各住人にとってのプライベートな場所であるが、マンションが建てられている土地は、それぞれの住人が共有している状態にある。また階段やエレベータ、廊下なども、そこに住む人たちが共通に使用するものとして存在

している。このコモン（共有）という状態を一步進めて、パブリック（公共）のもの、つまり誰もが自由に利用できる形態を取らせることを、この



建築家、思想家、研究者

坂本先生が生み出す建築の背景には、建築学の研究と、建築家としての活動の背景となった社会的状況が土台としてある。そこでまず建築学の研究として、どんなことを行なっているのかを見ていくことにしよう。

坂本先生の研究は、大きく三つに分けることが出来る。その内の一つは、一般の人々は建築、特に住宅をどう捉えているのかを調べることである。これは先ず人に様々な建築や住宅の形を見せ、どういったことを感じたかを詳しく聞き取ることから始まる。すると高級感があるとか、住んでみたいなどの答が返ってくるそうだ。これらの答えから、どんな人も住宅をある程度典型的な形に分類していることがわかるという。

人々の建築に対するイメージは必ずしも個人の感受性によるのではなく、住宅メーカーなどの情報に由来しているのではないかと坂本先生は考えている。つまり建築の形を見て「この家は前に見た別荘の写真に似ているから別荘ではないだろうか」という感情がまず生まれ、別荘すなわち高級感、住んでみたいという感情に直結するのだ。

自分が感じたと思った内容が、実は身近にあふれる情報の影響を受けた結果の産物だったことに当人は気付いていない。したがってこの研究は、建築を考えることによって、現代の高度情報化社会における我々の価値観とは何かを問うものであると言えるだろう。

このように捉えられる建築は、もともと何を目的として建てられているのだろうか。これは、もう一つ分野である建築論に結びついていく。

建築論とは、古くはローマ時代やルネサンス時代から現代に至る、多くの建築家が建築とはこうあるべきだと主張してきた言説である。坂本先生は、現代の建築家がどのような建築論を展開しているのか調べ、坂本先生自身が考える建築論とその結果とを比較し、検討している。

建築家の中には、建築の独自の美学をもって、建築自体が独立して存在すべきであると主張する

マンションを目指しているのではないだろうか。坂本先生の考える、現代にあるべき建築の姿が二つの設計例から徐々に見えてきたようである。

人がいる。つまり建築が観賞の対象となり、その形や空間的なイメージを住人に与えることが目的となっているのだ。これに対して坂本先生は、建築は住む人にとってお仕着せのものであってはならない、住む人自身がその建築の中から意味を見いだすべきだと主張している。真っ白なキャンバスに、自分の思い描く建物を自由に表現するとも言えるだろうか。

さて最後の分野は建築構成論。つまり建築はどういったものから出来ているかを論じる研究である。坂本先生はこの建築構成論に関して「当たり前と思うかもしれないが、なぜ住宅は柱や壁、屋根からできているのかを問うことだね」と述べている。

建築の中で、壁は空間を囲うという役割を持つから壁なのであり、屋根は空間を覆うという役割を持つから屋根である。しかし仮に図1のように囲う、覆うという二つの役割を一枚の平面に持たせたら、それは屋根であろうか壁であろうか。これが坂本先生が示している問いである。

これは単なる言葉上の問題に聞こえるかもしれない。しかし、たとえばテントやドーム型球場を思い浮かべれば、建築を壁や屋根といった概念で捉えることが意味のないことであることが分かるだろう。

普通の屋根の構成が当然とされるのは、結局そ

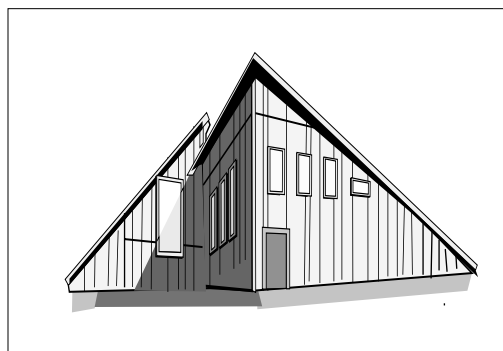


図1 壁？それとも屋根？

れが合理的、機能的であって、家というイメージを我々が既に持っているからに過ぎない。つまり覆うという行為を考えた場合、そこにあらかじめ壁と分離した屋根だけが存在するわけではないのだ。したがってこの研究の意義は、建築構成に対

する固定観念を振り払うことによって、新たな建築構成を生み出すことにあるだろう。

以上のような研究が、坂本先生の建築観の一面を形成していると言える。ではもう一つの土台である社会状況とは、一体どんなものだったのだろうか。



時代はクローズ、建築はオープン

1960年代後半、坂本先生が建築家として活動を始めた頃の社会では、都市というものは基本的に悪であるという考え方が支配的であったそうである。実は坂本先生もそう考える一人であった。

高度経済成長の時代、日本の街並みは経済性、合理性、機能性を重視した都市作りを目指してきた。その結果生まれた都市は、非常に無機質で精神的に安らぎを得るのは難しいものだった。街は車の往来が絶えることはなく、工場からの排気ガス、排水は、人々の目を街からそらすには十分なほど汚れ切っていた。必然的に人々は街、つまり外部とのつながりを拒絶しようとしていたのかもしれない。そうした状態を見て、もう人は外部に対して閉じた空間の中でしか安らぎを得られないのではと感じ、閉じた空間をいかにして魅力的なものにするかを考えていたそうである。しかし1970年代に入ると、公害問題などに対する反省から、世相は次第に都市に対して親近感を持つべきだという方向に移っていった。そうした中、坂本先生も閉じた建築は自閉化していると感じ始め、これからは建築という基本的には閉じているものを、いかにして開いていくかが重要であると考えようになったそうだ。

これからの社会に生きる人々は、自分を社会に閉じつつ開きもするというバランス感覚が重要になってくるように思われる。開く、閉じるといった感覚は、今とは異なる社会との関係が持てる建築を人々に必要とさせるだろう。

坂本先生に開かれた建築の今後の可能性についてうかがうと、次のような答えを頂いた。

「集合住宅は、一つの建物に多くの住戸がまとめられているということで共同体的であると思うね。しかしこの共同体にも、昔に比べるとかなりずれが生じてきていると思う。いかにして素晴らしい共同体スペースを作るかということが、建築の一つの価値規準としてあげられるんだけど、こういった考えがうまく行くのは理想社会だけで、現実の社会では、その共同体的内容をどう相対化し、排除するのが重要です。

都市に住み、社会に対してどう向き合うのかは、自分を確立するということに大きく関係してきます。社会的な空間ヒエラルキー（上下階層の秩序）はプライベートよりはコモン、コモンよりはパブリックという三段階の形を取りやすいんだけど、そうした共同体的空間であるコモンをやめ、プライベートをパブリックに直接つなげるべきで、それが現代の感覚にあっているのではないかと。

しかし少し前ならほとんど必要なかったオートロックも、今では都会に住む人にとっては当たり前機能になっている。オートロックはコモンな空間を作り出すし、社会的な階層化を強化する。こうした意味でも基本的に共同体的な空間を作り出すことは後戻りであると思うし、東京のような街で、理想と現実はどう折り合いをつけ、空間的な解決を目指すかが僕に与えられた仕事だと思います」

取材は坂本先生の研究室を利用させてもらったが、そこは隣接した部屋に行き来できるように通路が設けられていたため、広々とした感じを受けた。先生が提唱する開いた建築という感覚が、こんな所にも生かされているのかもしれない。

もし先生がこの東工大を設計していたら、どん

なキャンパスができていただろうか。想像するだけで楽しくなってくるのは私だけだろうか。

最後になりましたが、何度も取材におつきあくださいました坂本先生に、紙面を借りてお礼を申し上げます。

（小林 大介・切通 義弘）